教育出版

# Educo エデュコ

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.64
2024年

巻頭インタビュー p.2
作曲家・舞台音楽家
宮川 彬良（あきら）さん


知っておきたい教育 NOW p.4
① SNS時代のことばの守り方
② SDGs教育で「つなげる・組み立てる・まとめる」力を養う

きょういく見聞録 p.8
清水町ならではのかわせみ教室に

地球となかよしトピックス p.10
かしわ・さけたまプロジェクト

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14
【連載第2回】
「話す」は生きる力
～子どもたちの未来を変えるプログラム～

Front Runner p.15
【連載第3回】
作品作りを通して育む「未来を創る力」
～こどもエコクラブ～

ほっとな出会い p.16
栄養士 松丸 奨さん

# 音楽は「1」から始まる ——私を救ってくれた真理

作曲家・舞台音楽家 宮川彬良（あきら）さん

## 父に憧れ、幼くして作曲家を志す

父の宮川泰（ひろし）は「宇宙戦艦ヤマト」の主題歌や「恋のバカンス」など、数々の作品を生み出した作曲家です。幼い頃、友だちみんなが父の作った曲を口ずさみ、テレビをつければ父がピアノを弾いたり指揮したりしているので、「パパってすごいなあ」と憧れました。「僕もヒット曲を作って有名人になりたい」と思うようになったのは自然な流れだったかもしれません。小学1年生の頃には、作文で「将来は作曲家になる」と書いていました。

10歳前後でヘンリー・マンシーニの「子象の行進」という曲に夢中になったときのことです。普段は家にいない父が「その曲好きなの？」とピアノの前に座って伴奏形を教えてくれました。父はピアノを弾きつつ、コードを変えるたびに「次はどっちに行きたい？」と聞いてきます。心地よく聞こえる方を僕が答えていくと、「誰にも教わっていないのに、お前はもうブルースを知っているんだよ」と父は大きくうなずきました。この曲はブルースコードといって、12小節で一巡するコード進行で書かれているのですが、なぜそれが定番化されているかは世界の誰にもわからないのです。ブルースの循環コードについて知識のない少年でも、感覚的にどのコードが心地よいかを知っていることに父は感嘆した様子で、「どうしてお前にもわかるんだろう。不思議だね。音楽って不思議だね」とつぶやいていました。

こうした経験は小さい頃からずっと続きました。父は折にふれて「これ、いいだろう」と言っては僕の中に存在する音楽的な感覚に気づかせてくれましたが、父自身もそれを見て大いに楽しんでいたのです。

父は多忙でなかなか家にいなかったけれど、僕の大好きなビートルズの曲をピアノの発表会用にアレンジしてくれたり、僕が作曲したピアノの譜面を見て「ベースラインがよく書けている」と母に言づけたり、音楽の道に進むことをさりげなく応援してくれました。

## 一生の恩師との出会い

小学3年生のときに港区の赤羽小学校に転入したのですが、ここで素晴らしい出会いがありました。伊藤俊彦先生という音楽専任の先生に、4年生から6年生まで教えていただいたのです。50年以上経っても伊藤先生の授業の記憶は色あせず、よく覚えています。

当時は友人たちとバンドと称して、毎日のように音楽準備室に忍び込んでは、木琴やマリンバをかき鳴らして自己流の音楽を楽しんでいました。鼓笛隊が練習をしている隣で大騒ぎしたときも、先生は「よう、諸君！　やっとるかね！」とだけおっしゃって、おとがめはありませんでした。

大人になって考えるに、高価な楽器がたくさん置いてある音楽準備室に鍵もかけず、開けっぱなしにしておくものだろうかと疑問に思いました。もしかしたら僕たちがいつでも自由に楽器を使って遊べるよう、先生はお目こぼししてくださっていたのかもしれません。

50歳を過ぎてから先生に再会したとき、それとなく聞いてみたような気がするのですが、「それは言わない約束」という空気が流れて、はっきりお答えにはなりませんでした。

音楽家の家に生まれた僕が、音楽を心から「おもしろいものだなあ」と実感したのは、学校の日常の中でした。今の僕を形作る上で、伊藤先生の存在は大きなファクターになったと確信します。

**PROFILE**
1961年生まれ、東京都出身。劇団四季、東京ディズニーランドなどのショウの音楽で作曲家デビュー。代表作に、『ワン・マンズ・ドリーム』『身毒丸』《マツケンサンバⅡ》など、NHKでは『クインテット』『どれみふぁワンダーランド』『宮川彬良のショータイム』、木曜時代劇『ちかえもん』、連続テレビ小説『ひよっこ』など多数の番組音楽を手がけ、幅広く活動する。2015年よりOsaka Shion Wind Orchestraにて音楽監督を務める。著書に『「アキラさん」は音楽を楽しむ天才』（NHK出版）など。

## 大学で野口三千三（みちぞう）先生に衝撃を受ける

音大を目ざして受験勉強をしている頃から、音楽家としてのアイデンティティを探して悩むようになりました。西欧の音楽を日本人の自分が志すことに居心地の悪さ、ニセモノ感覚を抱くようになったのです。自分はどんな音楽を作りたいのか、何のために音楽をやっているのかもわからなくなりました。

東京藝術大学に入学してからも答えは出ず、悶々とする日は続きました。しかし一年後期の体育の授業で、「野口体操」で有名な野口三千三先生に出会い、世界が一変したのです。最初の授業で、先生は黒板に「自分」と縦に書き、何と読むかを問いました。学生たちが「じぶん」と答えると、先生は「然」と「身」をそれぞれ横に書き加え、「『自分』と書いて、『自然』の『分身』と読みます」とおっしゃったのです。瞬間、目の前の霧が一気に晴れて、救われた気になりました。

ずっと自分自身は「0（ゼロ）」だと思い込んで

いたけれど、生まれたとき、すでに「1」なんだと教えてもらった気がしました。ずっと己の存在意義のようなものを探していたけど、もうすでにある。どこからスタートすれば真に自分らしいのだろうと思い悩んでいたけれど、もう始まっていたのです。

0から始まると思えば帰る場所もなく、こんなに心許ないものはないけれど、自分はもう己の中に「自然」を備えもっているのです。世界中どこに行っても、誰に対しても重力は公平に働いて下に落ちる。自分の中に自然という物差しがあるのだから、その物差しを使って好きなところに行けばいいし、自分に照らして自分の感覚で判断していけばいい。こんな自分も音楽を作り楽しむ権利があると言ってもらえた気がして、非常に安心したのです。

## 0から始まるのか、1から始まるのか

あらゆる分野のあらゆる局面で、0と1のどちらをスタート地点と捉えるかは非常に大きな問題です。音楽は0からではなく、1から始まります。音楽は第一楽章の第一小節めの一拍めから始まるのであって、0拍めというのはないのです。

音程においてもオクターブは8度といい、同じ「ド」と「ド」は1度。隣同士の「ド」と「レ」は2度なのです。中学生のとき、楽典で最初にこれを聞いたときは違和感がありました。数学では同じ座標軸の同じ点にいるなら0のはずです。ならば「ド」と「レ」は1度になるはずだと中学生の僕は思ったわけです。どちらが自然に思えるかは分野によって違うと思いますが、音楽では、同じ音は1度、出発点は「1」なんですね。

そこに何らかの主体性があるものは「1」なのです。しかし主体的でないもの、単に数字上の概念だけのものは0なのです。そもそも数学に根本的な認識違いがあって、それが0と1の認識だと思えるのです。

高度な科学までに発展した数学も結構だけど、そこには命が足りていないような気がします。そこをないがしろにして、気持ちとか主観的なものは切り捨ててしまっていることに、今の社会の根本的な問題があると思われます。

原発事故のような社会に大きな影響を及ぼす不祥事が起きたとき、昔は「反省しました、1から出直します」と謝罪していましたが、最近は「0からやり直します」と言っているのをしばしば耳にするようになりました。「1からやり直します」なら、ちゃんと主人公がいて、あれこれ自問自答や反省しているのがわかります。しかし「0からやり直します」だと、そこには主人公も、やり直すと言っている本人すらもいない。多分、より丁寧だろうという考えから「0から」と言っているのでしょうが、より虚ろで何もないのです。確かに仕事を全部失ったのだから0からかもしれませんが、生きているのだから、やはり「1から」ですよね。自分が0から全て始めたと思うのはおごりの問題にもつながるのではないでしょうか。その考え方が直らない限り、また同じ不祥事を起こすように思えてならないのです。

我々がもう一段階上の世界に行くためには、これは決しておろそかにしてはいけない問題だと思います。

## 教育現場に願うこと

僕は教育に関しては門外漢ですが、客観的に見ていて感じるのは、文科省のかたや教育長など、教育に携わる人たちがよかれと思って「こうしよう」と着想した時点では、全てが正しいのだと思います。それが上意下達方式で現場に降りてくる過程で、オセロの色がいつの間にか変わってしまうのがよくあるように見受けられます。逆に現場の先生や生徒側から発信して、上に上がっていく場合でも同じ。しかしお酒の入った盃を一滴もこぼさないようリレーして運んでいくのは無理な話ですから、受け取るまでの時点で逆転現象が起こったり、鮮度が落ちてしまったりするのは仕方ないと思います。大事なのは、各所で受け取る側の自由が許されることではないでしょうか。

教育においては儲け主義に走るべきではないというのも、政治家や役人など多くの人にいま一度徹底していただきたい考えです。

かつて大阪市は教育委員会の所轄として、大阪市音楽団という歴史ある交響吹奏楽団を直営していました。僕は2010年からアーティスティック・ディレクターとして関わっていたのですが、大阪市の方針で、団の維持費が年4億円かかるという理由から編成人員の見直しがされたのです。そのとき当時の市長から言われたのは、「あなたがたが一流であるなら、一本立ちして普通に儲けられるでしょう」という言葉。

いまは全てを商売につなげて、儲かるか儲からないかで良しあしの判断をしがちで、教育界にもその波が押し寄せてきています。私立の芸術大学はどんどん門戸を広げ、ジャズ・ポップス科はもちろん、より多くの生徒を呼び込むために声優科を設ける大学も増えてきました。さすがに公立の小学校にはまだ被害が及んでいないと思いますが、教育現場そのものが「儲かっているものが尊いものだ」という方向に舵を切りがちであると感じます。教育と経済は同じ土俵では語れないので、切り離して考えてほしいものです。もっと皆さんで雄弁に議論したり、酒を酌み交わして語り合ったりして、目先の利益に飛びつきがちな少々さもしい今の状況に何とか歯向かってほしいですね。

大阪市音楽団は2014年に民営化され、僕もそれにともない音楽監督に就任しました。その後はOsaka Shion Wind Orchestraと改名し、現在にまで至ります。

音楽の世界では「売れることが最大の勲章、売れる音楽が最もよい音楽」と言われればぐうの音が出ないところもありますが、芸術の価値はそれだけでは計れないはずだと抵抗する自分もいて。いつも芸術性と実利という両極の価値観の狭間に立って、すごく登りにくいところを登ってきた気がします。

中学生の頃から舞台の台本を読むと自然と音楽が聞こえてくるたちで、舞台音楽など作曲する際は割と迷いがないのですが、全くの新曲を自分で自由に書く仕事はずっと苦手でした。「バレエのための音楽」という風に、どうしても己で手枷足枷を作らないと書き始められなかったのです。今でこそどう批評されても構わないと割り切って、自分の中から生まれた音楽を発表するのもさほど怖くはなくなりましたが、作曲家としては長い間そこが最大の壁でした。

やはり自分の中で売れることと芸術性という相反する目的があって、それが常にステレオのように響いていたのが原因だったと思います。しかしそうした価値観がせめぎ合う境遇に置かれがちなのも、自分なりのお役目があるのかもしれません。

壁と言えば僕の場合は生まれたときから、父親という巨大な壁がそびえ立っていましたからね。どこもかしこも見渡す限り壁だらけだったけれど、登っているとそれなりに楽しいので、気がつけばここまでやってきた、そんな気がするのです。

# SNS時代のことばの守り方

明治大学教授
伊藤　氏貴

**ポイント**

- SNSは生徒の国語力に、断片化、偏向という負の影響をもたらしている。
- 他者理解のためには、たんなる「共感」を越えなければならず、文学作品等を通じて、一見理解不能な他者の言動の裏にある意図を論理的に探る訓練が重要。
- 生徒が授業の前に自分で考えてくることができるよう、指針を示すことが大切。

## SNS時代に求められる「国語力」とは

「国語力」「読解力」の低下が言われて久しいが、この言説の具体的内実はどのようなものだろうか。少なくとも教員は、たんなる総体的な数値やころころ変わる教育政策に振り回されることなく、自分の目の前の生徒たちを定点観測して、そこで感じることの方を大事にすべきだと私は思う。

例えば、いわゆる「読解力」に関する「PISAショック」は意味ある驚きだっただろうか。2000年の第一回調査の8位から第二回の14位への転落がこの言葉のはじまりだが、その後、15位、8位、4位と盛り返し、2015年には再び8位、つづいて15位と低下した。

この乱高下の原因も明確には突き止められないまま、最新の2022年の調査ではいきなり3位へと躍進、「読解力が急回復」などと見出しを打った新聞も出た。しかし、今回はコロナの影響もあって前回首位の地域は参加せず、また点数は8位だった第一回よりも下がっている。順位だけで一喜一憂するのは、それこそ「読解力」の欠如を意味する。

国際的な順位などより重要なのは、子どもたちの言語環境の変化であり、その最たるものは間違いなくSNSだ。彼らは毎日大量の活字を受信／発信している。しかし、この変化は読み書きの能力をむしろ低下させている、という実感をもたれる方が多いのではないか。

SNS上のことばには、断片的であること、また偏向しがちという特性がある。短文での即座の反応が求められるからだ。それゆえ、じっくり物事のつながりを考える習慣が育たない。そして趣味や意見の合う人をすぐに見つけ出せる代わりに、異なる意見の人間を無視、排除することで、自分に都合のよいことばしか入ってこなくなる。特定の意見だけが強化される、いわゆるエコーチェンバー現象が生じる。

コスパ、タイパを重視する傾向がますますこうした現象に拍車をかけるなか、国語教育の目標とすべきは、限られた時間の中で数多く正答を出す効率性ではなく、むしろじっくり時間をかけて論理的にものを考え、また意見の異なる他者に耳を傾けることではないだろうか。

## 「共感」を越えて

じっくりと時間をかけて論理的に考え、他者に耳を傾けることを目標にしたとき、例えば、一読して感動に浸れる作品は、実は教科書には向いていない。気をつけるべきは「共感」である。

すぐに共感できることを求めるのが、SNS上のことばの特徴だ。そうしたことばは、脊髄反射的な共感＝「いいね」を通じて一気に拡散することを目ざす。ときに失敗して、炎上というかたちでも拡散するが、いずれにせよ、ここは瞬間的な「共感／反感」の二分法で物事が処理される世界である。教室や教科書のことばがそのようであってはならない。

例えば仮に『走れメロス』の結末がどれほど感動的だったとしても、そこにとどまっていては教材としてとりあげる意味はない。むしろ熱い友情と見えるものの中にも疑念や諦念が混じる現実に気づき、最後に王を簡単に許してしまうメロスの単純さを疑い、さらには自分を感動させた作者の叙述法に思いをいたすところまでいかなければならない。

太宰が作中で語りの視点の位置を変えたのはなぜだったのか。こうしたことを考えることで、自分たちの周りにある全ての言説には語り手が存在し、ということはそこには語る意図というものが存在することに気づく。

米国防総省には「物語（ナラティブ）」を戦略として研究する部署があるそうだ。コマーシャルは言うまでもなく、報道も完全に公正中立ということはありえず、必ずなんらかの「意図」をもったナラティブを通じて共感を誘おうとしている。小説の「語り（ナラティブ）」について深く学ぶことは、たんなる「共感」を越えて、それがどのような手続きを経てもたらされるのかを論理的に考えることである。

だから例えば、教科書を指して「今どきの若者が共感できる作品が少ない」というような批判は、的を外している。SNS内の自分の居心地のいい言語空間に閉じ籠るのでなく、多様性を認めつつ世界を広げていくためには、共感できない他者をどうやって論理的に理解するかが重要になってくる。

文学作品を通じて、一見理解しがたい他者の言動にも、実は論理が内在していることを学ぶことがその助けになる。あるいは、評論は、すぐには納得しがたい結論をもっているはずである。評論とは、論理を通じて読者を説得する文章のことで、たんなる説明文ではない。その説得の論理を辿ることで、他者理解が可能になる。

## 教える前に考えさせる

そのためには、生徒自身がここに時間をかけて、自ら共感できない相手に橋を架けるようにしなければならない。著者の言いたいことを教師がいきなり説明してはならない、ということである。

私自身の予備校講師時代の経験で言えば、記述問題の添削を一人一人していたが、基本的には授業の一週前までしか受け付けなかった。授業では当然、解答も、それに至る道筋も説明せざるをえない。それを聞いてしまったあとの添削にはあまり効果がない。生徒が自分で直すにしても、聞いたことを整理するだけになってしまう。そうではなく、自分でまず解答し、それに最低限のコメントをもらって、自分で再考する、この過程でこそ、理解を深める力が養われる。

授業も、全員で本文を読み、というところからではどうしても生徒自身が考える時間が足りないのではないか。グループワークもいいが、なおさら時間が必要になる。授業で本文をはじめて読むのではなく、あらかじめ読んでおいてもらう、少しは考えておいてもらうのがよいのではないかと思う。

だが、そう言われても、生徒としては何を考えればいいのか途方に暮れるに違いない。だから、一つ二つ、指針を与えておいてもいいだろう。再び『走れメロス』を例にとれば、「語り手が変化するので、誰が語っているのかに注意しながら読んでおいて」などと。授業では、この変化を確認し、それが何のためだったのか、読者にどんな影響をもたらすのかを話し合う。

いずれにせよ、SNSに浸る生徒たちのことばを守るために大事なのは、あらかじめ生徒に考える時間を十分に与えることだ。瞬発力は各自生活の中でつけてもらい、授業では熟考を重視したい。

# SDGs教育で「つなげる・組み立てる・まとめる」力を養う

九州大学主幹教授
馬奈木（まなぎ）　俊介

**ポイント**

①日本は基礎教育がしっかりしており全体的に学力が高いが、今後の課題としては子どもが時間をかけて考え、意見を表明できる場を設けることが重要である。

②GDPのみで国の豊かさを測ろうすると本質を見誤る恐れがあるので、GDPを補填し、SDGsの有効性を測定する概念として、「新国富指標」が有用である。

③SDGsの各目標を現実の社会問題とつなげて考えられるよう、教育現場は生徒を導いていきたい。子どもたちが学校で学んだ知識がつながりあい、広がっていくことが理想である。

## 日本の公教育の長所と短所

日本の公教育の強みは、算数を含めた基礎教育がしっかりしていることです。国際比較で見ても日本は小中高大と全校種にわたって学力が高く、優れています。一方、議論をしたり意見を取りまとめたりすることにはあまり時間を割かないので、弱いとは前々から言われています。

国際社会で日本の地位が低下していると言われますが、異なる意見をもつ人々を調整力や交渉力を駆使してまとめ上げ、存在感を発揮する機会は確かに少ないかもしれません。

そういった能力を伸ばすために、学校教育においては単に○×問題で高得点を取ればよいとするのではなく、子ども自身が時間をかけて考える機会を与えることが重要です。さらに、その考えを表明できる場を増やしていくことも大事ですね。

正解がない問題であっても、子どもが気後れすることなく自分の意見や考えを表明できる場があることが大事です。自分で文章を考えて書くこともこれとつながります。上手な文章でなくてよいので、自分の考えをまとめて発表することが重要です。

自分で考える機会がないのが今の教育の問題なので、指導する先生がたは大変ですが、今後はそういう場ができてほしいと思います。

## GDPを補填する「新国富指標」とは

いまはSDGsが学校教育にも取り入れられて、大変よいことだと思います。このSDGsの有効性を測定するにあたって、私は「新国富指標」という概念を提唱しています。これはGDPを補填する考えとして有用です。

GDPは国の目標のようになっていますが、その年の消費と投資に使ったお金の総額にすぎないので、これを社会の価値としてしまうと、本質を見誤る恐れがあります。

例えば戦争で町が破壊されたら、これまで投資して作ったものが壊れているから、1回マイナスにして計算しないと社会の豊かさにつながらないのに、単純に建設会社の社員の収入が上がればGDP上はプラスになります。同様に、病院は人を救う価値があるはずなのに、災害や戦争で人が負傷したことをマイナスと計算せず、患者が増えて医者の収入が増えればGDP上はプラスになります。自然環境も同じで、生物多様性の環境が悪くなれば地域の自然の価値は下がっているのに、自然破壊してエネルギー会社が得をする都市開発をすることでGDPが増

えたりするのです。

このように実質的にはマイナスでもＧＤＰはプラスになることがあるので、プラスとマイナス両方のトータルで考慮する指標を新国富指標と呼んで、世界中に広める活動をしています。

アメリカ・中国・イギリス・カナダは積極的な導入を検討しています。学校教育に浸透するにはまだ時間がかかるかもしれませんが、教育も健康も社会インフラも自然環境も実は同じ軸で評価できるという本質は理解されるはずです。それぞれが相対的に大事なので、それら全部を見すえつつ、何に注力したらよいかを考えるきっかけになると思います。

## 学校現場でのＳＤＧｓの取り上げ方

ＳＤＧｓは学校の教科書にも取り上げられています。教科書から発展して具体的な社会問題について考え、調べる場がもっとあるとよいと考えます。現実の社会問題に対して、ＳＤＧｓはあまり関係ないと言う人もいます。ＳＤＧｓは極端に言えば単純な目標の羅列なので、具体的な問題と結びつけるのは難しい。実際の社会問題とどうつながるか、想像力をふくらませて考える場が必要です。わからないことはすぐにネットで検索するのではなく、自分で考えて自分なりの意見をもつことが大事です。それには前提となる知識が必要なので、小中学生に教える際は工夫が必要かもしれません。

社会で起こっている現実的な問題を自分事にリンクして捉えたり、さまざまな問題を連係させて考えたり、何かと何かを「つなぐ」のはすごくよいことです。そういった創造力を養うトレーニングとして、ＳＤＧｓは大いに使えると思います。

## 評価は重要ではない、自分で考えることが大事

私は大学で教えるときに毎回課題をたくさん出すのですが、それは評価することが目的ではなく、考えて表明する場を学生に与えることが目的です。真剣に課題に取り組み、アウトプットしたものを提出する行為を何度も繰り返した学生と、評価に関係ないからと適当に手を抜いた学生とでは、半年後には大きな差が出ます。真剣にやった学生はやはり伸びます。別に私の専門分野に関係なくても、いろいろなものに取り組んで自分の能力を底上げする力が育つのです。与えられた課題についてどう調べるか、何を考えるかを学生たちは何度も練習します。そういう練習を何回も積み重ねるのが大事で、正しい答えは重要でないのです。小中学校でそれを実施するのは大変なのはわかりますが、自分で調べて考えをまとめて書くという作業を繰り返すのは大事なことなので、可能な限り行った方がよいです。

## つなぐ事例 別府市と協働で温泉調査

コロナ禍で温泉街が大打撃を受けたとき、別府市と協働で、温泉効果の実証調査を行いました。温泉は体によいと昔から言われていましたが、科学的な検証はされてこなかったので、言い伝えの域を出なかったのです。調査の結果、温泉に入ることで腸内細菌が増えるとわかり、体によいことが実証されました。

腸内細菌は医学の範疇ですが、私は工学部で専門がまち作りでもあり、今回の別府市との協働はさまざまな分野が連係する事例といえます。別府温泉の価値を上げて地域活性に貢献できれば、新国富指標では地域の自然活用という意味で自然指標になりますし、人の健康に貢献できれば人的資本になります。温泉事業者には役立つし、経済界の人はおもしろいと広めてくれたらうれしいし、市民も参加してほしいし、行政など公的な人たちはどう支援できるか考えてほしい。持続可能な地域社会をつくるため、大勢の人が関与し、協力しあっているのです。

学校では、複数の物事が密接につながりあい、影響を及ぼし合う事例として紹介できると思います。腸内細菌という専門用語は忘れたとしても、健康や温泉効果というトピックに惹かれる人もいますし、入浴中に体に加わる圧力の話が、物理や数学につながったりもします。そんなふうに学校教育のなかで考えるきっかけを何個も与えてあげて、何か興味が惹かれるものをたくさん導き出す機会になるとよいと思います。

何か興味を惹くものを一つでも見つけられれば幸運ですが、それが誰かに押しつけられたものだと、子どもはいずれ飽きて嫌になります。でも自分で考えて物事をつなぎあわせ、考えを広げていったら、興味をもてる何かを見つけだせるかもしれない。

複数の物事や人々がつながる事例が世の中に増えつつあることを学校教育で教えてあげるとよいと思います。あまり専門的にならないよう、なるべく身近で小さい話題の事例を組み合わせて関心を広げていく、そのお手本を学校教育で示してくれるなら、大変ありがたいと願っています。

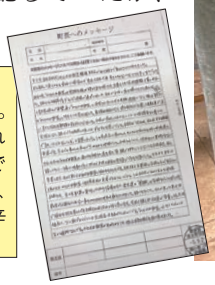
### 高校生とその保護者の悩みに寄り添う教室に

中学卒業後に不登校となった生徒（保護者）は、相談を受け止めてくれる場所もなく、一人で悩んでいることが多い。高校２年生の段階で相談を受けた保護者には、現在の高校にこだわるのではなく、次のステップに進むためにどうしたらよいかを一緒に考えた。最終的に高校を中退、他へ編入学し、大学を受験することになった。定期的に母親との面談を重ねるうちに、子どもとも志望校決定に向けて話ができるようになった。その子なりの歩みで、自分自身の目標に向かって前に進めるような進路決定を促した。

## かわせみ教室独自の活動を

### 夏休みのバーベキュー会

参加を希望する子どもがいるのかどうか心配したが、野外活動センターにてバーベキュー会を実施した。食材・飲み物等を分担して購入し出発する中で時間の経過とともに、子どもどうしの会話が生まれてきた。と同時に、保護者の間でもお互いに話し込む姿が見られるようになった。それぞれがうまくかかわることができるのか心配していたが、満面の笑顔の中で打ち消された。



●保護者から関義弘町長へのメッセージ　（一部抜粋）
かわせみ教室でBBQがあり、親子で参加させて頂きました。引っ越してきてから学校になじめず、早退・欠席と書ききれない位、とっても辛い日々でした。BBQが行われ私は現場で「私一人じゃないんだ」と実感しました。この会に参加して、たくさんの同じ経験をもつお母様達と共感でき、今までの辛かった時間などを忘れられた時間でした…

### 校外学習　韮山研修へ

秋には校外学習で韮山研修を実施した。交通機関を利用して世界遺産に登録されている韮山反射炉まで行ってきた。電車に乗り車窓からの景色を楽しむ子、中学生のお姉さんとの話を楽しむ小学生、家に買うお土産を楽しそうに探している姿など、集団で友だちが横に一緒にいる中での姿だった。

### 保護者会の開催

バーベキュー会の取組後は、「また保護者どうしと話がしたい」という強い要望があり、保護者会の開催へとつながった。保護者会では日々の苦労や悩みを吐露し、お互いの話を共感し合える時間となった。また、かわせみ教室での子どもたちの成長ぶりを確認できる場となった。

## かわせみ教室のこれから

本年度４月からは拠点となる場所が決定し、今まで以上に幅広く支援に向き合うことができる。しかし原点を忘れず、フットワークよく小回りが利く、きめの細かい支援で目の前の子どもたちや保護者と向き合いたい。「かわせみ教室があったからこそ、わが子は本来の自分らしさを取り戻せた」と語ってくれた保護者の言葉のように、心が元気になれる場所から、さらに「子どもたちが安心して次の一歩を踏み出すことができるかわせみ教室」としていきたい。

また今後も、不登校児童生徒への支援に留まらず、その保護者が必要とする相談場所や保護者会等の情報提供、さまざまな学びの場や居場所につながることができるための支援等を充実させていきたい。

きょういく見聞録

# 清水町ならではのかわせみ教室に

清水町は静岡県東部に位置し東西約 2.7 km、南北約 4.5 km で面積が 8.81 $km^2$ と非常にコンパクトな町であり、人口約 3.2 万人の地方都市である。国指定天然記念物である柿田川が町の中心部を流れている。その中に小学校３校（1,616 名）、中学校２校（865 名）が設置されている。不登校児童生徒が増加する中、本町の教育は「誰一人取り残されない教育の実現」を目ざし、令和３年４月に適応指導教室として「かわせみ教室」がスタートした。

静岡県駿東郡清水町教育委員会　かわせみ教室担当　**渡邉　英雄**

## 子ども一人一人に寄り添う教室に

不登校になった理由や原因など、子ども一人一人がかかえている課題はさまざまである。その課題に向き合うためには、かわせみ教室が「ほっとできる場所」「笑顔になれる場所」でなければならない。そのためには、通室を決して無理強いせず、「待っているよ」「顔が見たいよ」という姿勢で子どもや保護者と接するように努めた。しかし通室が定着するまでには、欠席を繰り返すことも何度かあった。そのようなときほど、「待ってるよ」という言葉が大切であったと思う。その言葉には子どもだけでなく、保護者も安心するのではないかと考える。

教室では、教科の学習や、カードゲーム、ものづくり、公園を散歩するなどさまざまな活動に取り組んでいる。そのいずれもが、その子の現段階で無理なく興味をもって取り組める内容を選択した。その延長線上で登校をチャレンジする子どもには、保護者と一緒に、放課後の誰もいない体育館でボール遊びやとび箱、バドミントンを通して体を動かした。

かわせみ教室が３年めに入ると通室の子どもが 10 名から 22 名となり、支援に２名の職員で向き合っている。その中で、子どもと一緒に登校し別室で過ごしたり、教室で授業を受けるということもあった。担任との密接な連携と学校ぐるみの支援の、１年近くにわたる積み重ねにより、現在６年生の児童は週に４日間登校し、１日をかわせみ教室で過ごすようになった。３年前の姿からは想像もできないほどの成長ぶりである。

## 進路に寄り添うかわせみ教室に

今年度は中学３年生が４名通室しており、それぞれの進路に寄り添うことも大きな課題であった。不登校になった生徒の多くは、選択肢が少なく、行きたい学校というより、行ける学校を選び、それで安心してしまうケースもある。かわせみ教室では、中学３年生になってからいくつかの高校を一緒に見学することで、自分に合った行きたい高校を志望校として決定するようにしてきた。それにより、進路を自分自身の問題としてとらえ、自己の進路に立ち向かっていく意識や意欲を高めることができた。志望校が決定してからは、受検に向け面接練習に４人で取り組むことにした。それぞれの個人面接を見て、感想を言い合うことで、他者のよさを見取り、自分を見つめることにつなげたいと考えた。４人で行う面接練習の光景からは、緊迫感と個々の真摯で真剣な姿に力強い成長を感じた。

## 保護者の思い、苦しみ、悩みに寄り添う教室に

不登校の子どもを抱える保護者の悩みは、経験した者でなくては語れないほど辛く、苦しいものである。周囲の子どもたちが元気に明るい笑顔で登校している姿を、自分の子どもの姿に重ねられないもどかしさが絶えず保護者の胸中に去来している。保護者の言葉一つ一つを丸ごと受け止めながら話を伺っていると、目にするのは保護者の涙である。そして、その涙の裏側には子どもの姿が見えてくる。子どもと向き合っていくうえで、日々子どもの姿を見つめ思いを注いでいる保護者との連携は不可欠のものである。保護者の思い、苦しみ、涙に寄り添う教室でありたいと思う。保護者の安心感は、そのまま子どもを見つめる強い力につながっていると考える。

●児童も興味深く観察

# 千葉県柏市

一般財団法人 東葛教育会館 事務局 阿部 雅彦

## かしわ・さけたまプロジェクト

柏市の小学2年生は2学期に国語科の説明文「さけが大きくなるまで」を学習します。しかし、鮭を見たことがない児童が大半のため、鮭の卵の孵化から稚魚に成長するまでを、実際に育てることで、自然や生命の厳しさ、尊さや不思議さ等を少しでも身近に体験することができると考え、約20年以上前から柏市教頭会有志が中心となり、福島県木戸川漁協の協力を得て、この取組が始まりました。

### 東日本大震災で休止…存続の危機に

約20年前から続けていた「鮭の卵を孵化させる」という取組が、2011年の東日本大震災により休止せざるをえませんでした。しかし2018年度より、新潟県三面川漁協の協力を得て復活することができました。そして、毎年口コミで少しずつ参加校が増えてきました。

そこで今後も持続可能な取組にしていくため、2021年度より、柏市校長会、千葉県教育研究会柏支会、柏西ロータリークラブのご理解・ご協力とご支援をいただき、一般財団法人東葛教育会館が事務局となってこの取組を進めていくことになりました。

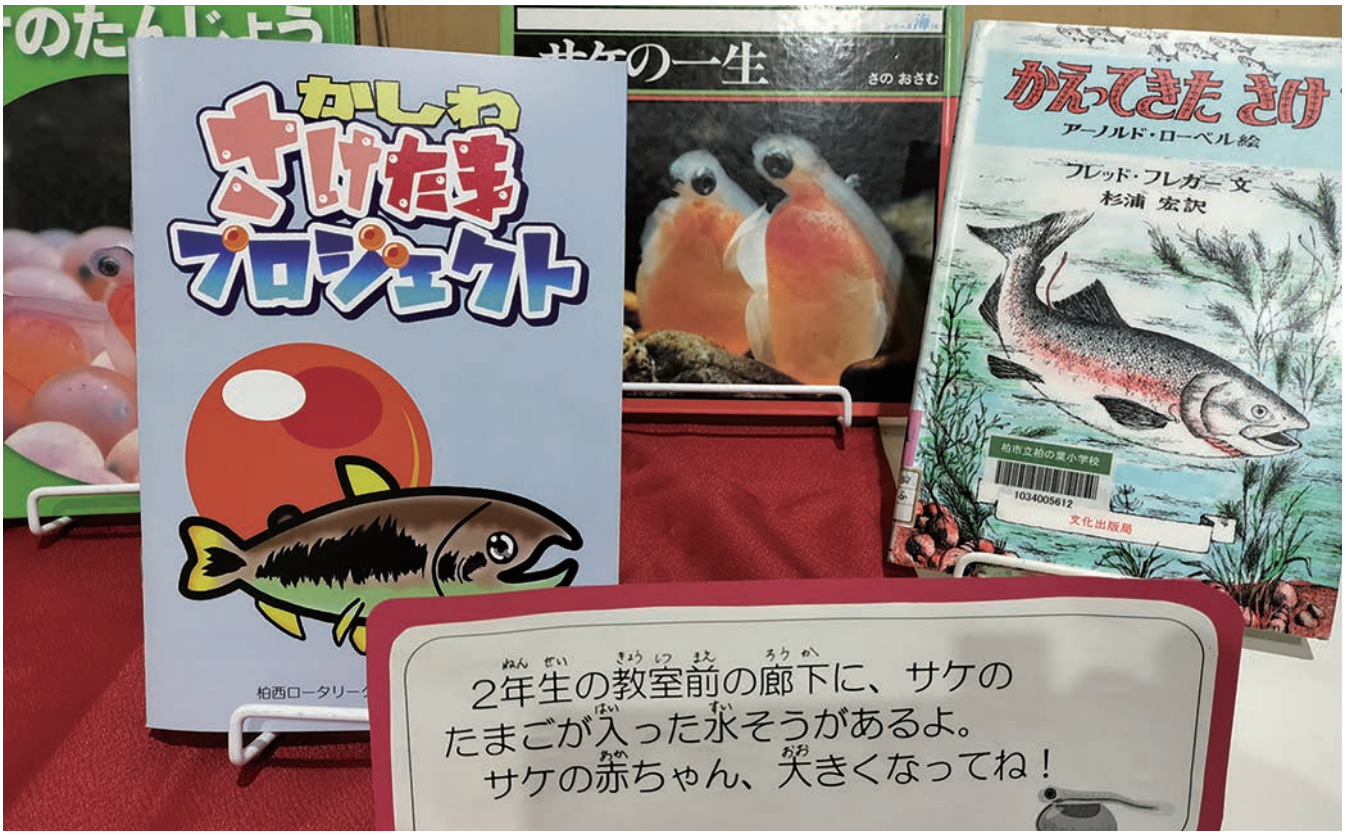
柏西ロータリークラブHPで現在も閲覧可能

### 2021年度の取組について

2021年8月、柏市校長会の梅津健志氏の呼びかけで、柏西ロータリークラブ水野会長と山本理事、今まで取組の中心となってきた秋谷雅和氏と一般財団法人東葛教育会館事務局の阿部雅彦と庄子正光が集まって初会合を開き、この取組を「かしわ・さけたまプロジェクト」と命名しました。

その後、何回かの打ち合わせを行い、①卵の配布を11月25日、放流は2022年2月18日に取手市小堀の渡し・船着き場で実施すること。②水槽・卵などの必要経費、さらに卵の配布と稚魚の回収等についても、柏西ロータリークラブが負担し、全面協力するということを確認しました。

11月25日には柏市内14の小学校




●図書室の展示

●放流の日を迎える（中央が秋谷雅和氏）

●鮭の卵の受け入れ準備完了

●卵の配布準備

に、柏西ロータリークラブの協力で鮭の卵200粒を配布しました。卵は各学校にて孵化させ、稚魚になるまで育ててもらいました。育て方についてはマニュアルを各学校に配布し、児童は放流日まで毎日観察を続けていました。

2022年2月18日には、柏西ロータリークラブが稚魚を各学校から回収し、取手市小堀の渡し船着き場で放流を行いました。この模様は、各学校に向けて、ユーチューブでの同時配信も行いました。

## 成果と課題

2年生の子どもたちが、教科書の「さけが大きくなるまで」の「鮭の卵の孵化から稚魚を育てる」までを身近に観察することができたことは大変よかったと思います。また上記関係団体との協力で、この「かしわ・さけたまプロジェクト」が実施でき、今後も持続可能になりました。2022年度には20校以上の参加がありました。

しかし2023年度は鮭の不漁により、実施することができませんでした。今後はSDGsの視点からも、「かしわ・さけたまプロジェクト」の取組も進化していくことが必要であると思っています。

全国各地のさまざまな取組を紹介します。

## 宮城　ストップ・ザ・不登校

元仙台市教育長　阿部　芳吉（よしきち）

**―「相談・まなび塾」の誕生 ―**

少年非行や不登校に、約 40 年間向き合ってきた私は、「話を聞くだけでは、らちが明かない」と訴え、歯を食いしばって生きている保護者の気持ちに応えるため、教育相談・教科指導にすぐれている退職校長とともに、相談・まなび塾を設けました。（令和４年９月１日設立）

**―ストップ・ザ・不登校シンポジウム―**

仙台市の昨年度の不登校児は 2,567 名となり、この２年間で約 900 名の増となっています。この流れに歯止めをかけるため、今年の１月に次の３項目をねらいとして「ストップ･ザ･不登校」のシンポジウムを、仙台市富沢市民センターで開催しました。

①不登校対策を地域ぐるみで取り組む提案。
②仙台市教育委員会の不登校対策機関「児遊の杜」（仙台市適応指導センター）や、学級に入れない子どもの居場所であるステーションの理解。
③親子に対して、将来を見すえた指導に励んでいる「相談・まなび塾」の認識。

シンポジウムで、児遊の杜の遠藤克宏所長は「在籍外教室ステーションは、不登校の未然防止に役立っている」と強調し、富沢中学校の鈴木丈治教頭は「校内に安心して通える場があることで、不登校の生徒は徐々に減ってきた」と説明し、ステーションで学んでいる生徒２名を指導している相談・まなび塾の小野英男副塾長は「じっくり耳を傾け、個に応じた教材を工夫することで、情緒も安定し、学力も向上する」とこれまでの取組を報告しました。

**― 今後の取組 ―**

次年度の最初は、袋原中学校区で「ストップ・ザ・不登校」を実施する予定ですが、まずは富沢中学校が他のモデルとなれるよう、親父の会などと手を携えて戦略を練っていく所存です。

また、相談・まなび塾には、サッカー日本代表の森保監督やあん馬の元世界チャンピオンの亀山耕平さんからもエールをいただいていますが、スポーツを通して「ひきこもり傾向の子どもの目を外に向けられないか」などの研究も推進する予定です。

## 全国　ライオンズクエストプログラム ～生徒指導提要との関連～

青少年育成支援フォーラム ライオンズクエスト認定講師
大阪府教育庁 小中学校課 生徒指導アドバイザー
寺西　勉

『生徒指導提要』が 12 年ぶりに改訂されました。『生徒指導提要』とは、生徒指導のための学校や教職員の手引書で、指導を行う際の基本的な視点や方向性が示されています。改訂版で注目されるべきは『発達支持的生徒指導』という新しい概念に基づく取組の推進ではないかと考えます。

『発達支持的生徒指導』は、「日々の教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、及び、授業や行事等を通した個と集団への働きかけが大切であると提唱し、例えば、自己理解力や自己効力感、コミュニケーション力、他者理解力、思いやり、共感性、人間関係形成力、協働性、目標達成力、課題解決力などを含む社会的資質・能力の育成や…（中略）…全ての児童生徒の発達を支える働きかけを行う。」とされています。まさにすべての子どもたちに将来や人生を豊かにする一連の能力であるライフスキルを育み高めていくことが提唱されています。

ライオンズクエストプログラムは、これらのライフスキルを獲得するためのプログラムであり、スキルを理解する『わかる』ことから日常の生活場面で『できる』ことまで高めることをめざしています。

このプログラムを活用するには、ライオンズクラブと青少年育成支援フォーラム（JIYD）が主催する研修（ワークショップ）を受講する必要があります。研修修了者には、未就学児から中高生までを対象とした発達段階に合わせた９段階の電子教材を自由に閲覧活用することができます。この教材を使いながら学級などでライフスキル教育を実践していきます。

ライオンズクエストプログラムやワークショップにご興味のある先生がたは、下記 QR コードからホームページをご覧いただくとともに、お近くのライオンズクラブもしくは青少年育成支援フォーラムまでお問い合わせください。

QR コードからホームページをご覧いただけます。

## 熊本　いにしえ人に思いを馳せて

熊本市塚原歴史民俗資料館　主任主事　米村　均（ひとし）

当館は、国指定史跡塚原古墳群の北端に位置する施設です。館には、熊本市南区城南町各遺跡からの出土品や古文書類・民俗資料などを展示する考古・歴史・民俗の常設展示室を備えています。

江戸時代に書かれた『肥後国誌』に「塚原村ニ九十九塚アリ」と記された塚原古墳群は、九州縦貫自動車道建設に伴う大規模発掘調査でその存在価値が高く評価されました。自動車道をトンネル化し古墳群を残すという稀有な史跡保存展示が実現した歴史を誇ります。復元された古墳の中には、天井をガラスで覆い、中の石室が見学できる「丸山２号墳」があり、また資料館に隣接した「りゅうがん塚古墳」は、側面がカットされ内部の石室を確認できる構造で一見の価値があります。方形周溝墓・円墳・方墳・前方後円墳などのさまざまな古墳が約 200 年間にわたり築かれ、現在も見学できるところが塚原古墳群の魅力でしょう。保存された塚原古墳群から出土した資料等を展示すべく、昭和 58（1983）年 11 月 1 日に開館したのが当館です。

昭和 30 年に誕生した城南町の初代町長を務め、戦前・戦後を通して熊本の考古学会を牽引してきた小林久雄氏の業績も館の誕生に大きくつながっています。氏が長年にわたり収集した資料、通称「小林コレクション」も数多く展示しています。中でも昭和 11 年発見の『台付舟形土器』は弥生時代の祭事に使われていた酒器と推定され、独特の形状から国指定重要文化財に指定されています。

貴重な資料の展示に加え、近年はさまざまな体験教室も開催し、来館者のかたがたにいにしえの文化にふれ親しむ機会をご用意しています。土器・埴輪づくり、勾玉づくり、藍染体験など人気のイベントです。こどもたちの学習研究の場として、また広く生涯学習の場としてご利用ください。

QR コードから資料館のホームページをご覧いただけます。

## 富山　カンボジア王国との交流を通した人材育成

入善町教育長　小川　晋（すすむ）

入善町では、町内の中学生をカンボジアに派遣する事業と、カンボジアの中学生を受け入れる事業を行っています。これらの事業は、さいたま市北区在住で、大宮中央ロータリークラブに所属し、入善町出身かつ名誉町民である泉英明氏のご寄附を活用し、実施しています。泉氏からは、「長い内戦により疲弊したカンボジアの復興と、両国の発展のため貢献できる人材の育成に寄与したい」との思いとともに、これまで多大なご寄附をいただいています。

中学生をカンボジアに派遣する事業では、現地小中学校や山本日本語学校の生徒と交流するほか、アンコールワットなどの世界的な文化や自然にふれます。この事業は平成 18 年度から実施し、これまで 219 名を派遣しました。子どもたちは現地での約 4 日間の滞在を通して大きく成長します。昨年、私もカンボジアを訪問しましたが、まさしく「百聞は一見に如かず」でありました。子どもたちが 14 歳という多感な時期に、この経験を得ることは、未来を担う人材の育成という観点からも大変素晴らしいことだと実感しました。

カンボジアの中学生を受け入れる事業では、訪問団が町内小中学校を訪れ、授業体験や交流活動を行うほか、各所で日本文化を体験します。学校訪問では、カンボジアの中学生の高い学習意欲や学習能力を目の当たりにし、自身もこうありたいと刺激を受ける生徒も少なくありません。また、昨年、引率の先生が「日本を訪れることが生涯の夢であった」と涙ながらに語っており、この事業は子どもたちだけではなく、多くの人々に夢と希望を与える取組だと再認識しました。

今後は、子どもたちの学びをより深めるため、オンラインを活用し、さらなる交流機会の増加を図るなど、寄附者の泉氏をはじめ関係者のご助言をいただきながら、事業を発展させていきたいと考えています。

地球となかよし ゼミナール

【連載第２回】（全３回）

# 「話す」は生きる力
## ～子どもたちの未来を変えるプログラム～

一般社団法人
アルバ・エデュ代表理事　竹内明日香

前回の号では、活動を始めた経緯や子どもたちに起きた変化について書きました。今回は「子どもたちの話す力や生きる力を育むために、どのようにプレゼン授業を導入しているのか」について、よく聞かれる質問にお答えする形でお伝えします。

**Q1** どの科目で導入するのがよいのか？

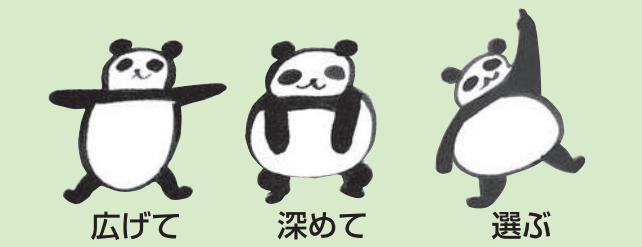
**A1** 国語や総合的な学習（探究）の時間に取り入れられることが多いのですが、図工・美術・家庭科の作品を紹介する、社会でグラフを駆使しながら話す、音楽で好きな曲について発表するなど、実はどの教科でも楽しんで実践できます。全教科でプレゼンを試されているという事例も複数ご報告いただいています。

**Q2** プレゼン授業とはスライド作りの指導ではないのか？

**A2** 全国の教員研修を通じてご提案している授業は、「考える」「伝える」「見せる」という３つのステップに分かれます。「考える」ステップについてはQ3で詳しく述べますが、個人や少人数の演習で考えを広げ深めながら発表内容を考える時間。次の「伝える」ステップは発声練習を挟んで話す練習をする時間。さらに、考えたことを端的にビジュアル資料で表現するのが最後の「見せる」ステップで、スライド作成はここにあたります。一人一台端末を有効活用してスライドを作成することもとてもよいのですが、ソフトをいじるだけに長時間を充てるのは避けたいところです。

**Q3** 既存の国語の「話す・聞く」授業との違いは何か？

**A3** 国語では、「聞きあうこと」や他者の考えと自分の考えを「比べる」ことを重視しますが、私たちが提案するプレゼンテーションの授業は、まず自分の「＊イイタイコト」を見つけることから始めます。児童生徒に話すことを好きになってもらい、主体性をもってもらう上で特に大切にしていることです。




教材で子どもたちをナビゲートするパンダたち

調べ学習にも通じる、考えを「広げる」作業、主語を自分にして考えを深掘りする「深める」作業、そのなかから最終的に聞き手に伝えたい内容を「選ぶ」作業をしてもらい、ストーリーをつなげて話す内容を練ります。

ここで論理的であることはひとまず横に置き、原稿を作って推敲を重ねたり、原稿を一言一句覚えたりすることも推奨していません。

**Q4** どのようなテーマが効果的か？

**A4** 小学校低学年には、話すが楽しくなるテーマ、例えば長期休暇の思い出、地域探検等。小学校高学年からは防災や理想の学校、行事の提案等。中学生には常識を疑ってみるなどクリティカルシンキングや、高校進学を前に自分の人生プラン等。もし少しでも余裕があるのであれば、単純に子どもたちそれぞれの「好きなこと」を発話してもらうと、最高の笑顔が見られるはずです。

こんなテーマが盛り上がったという事例があれば、ぜひ弊社団までお知らせください。参考にさせていただきたいです。

＊強調のために小学校１年生からカタカナで伝えています。

**竹内明日香（Aska Takeuchi）**
旧日本興業銀行にて国際営業等に従事後独立。日系企業の海外向け情報発信やプレゼン等を支援する傍ら、２０１４年に（一社）アルバ・エデュを設立。自治体や学校でアドバイザーを務める。著書に『すべての子どもに「話す力」を』（英治出版）、『思いを伝える「話す力」』（Ｚ会）。東京大学法学部卒業。

Front Runner

【連載第３回】（全３回）

# 作品作りを通して育む「未来を創る力」～こどもエコクラブ～

公益財団法人　日本環境協会
教育事業部
東（あずま）　尚子（しょうこ）

「こどもエコクラブ」では環境活動をしている子どもたちの団体を対象として、日頃の活動をまとめた作品を募集する「全国エコ活コンクール」を年１回実施しています。募集する内容は、仲間で作る壁新聞、一人でじっくり取り組む絵日記、パソコンや動画編集のスキルの腕試しにもなるデジタル作品の３種類。子どもたちのやる気や興味に合わせて自由に選んでチャレンジしてもらっています。

その中でも壁新聞は子どもたちの個性がいちばん出る楽しい作品が毎年勢ぞろいしており、本コンクールの花形と言っても過言ではありません。生き物の調査データを継続的にまとめ、いまや「定期刊」として地域のかたがたの楽しみになっている壁新聞もあれば、春から冬までの活動をすごろくのように表現することでワクワクしながら読み進められるようになっているもの、オリジナルキャラクターが活動内容をわかりやすくナビゲーションしているもの、周囲を小さな絵や写真で囲んでコマ割りマンガのように活動の様子を紹介するものなど、どの作品も子どもたちの自由な発想が満載です。誰もが楽しめるだけでなく読めばその地域の環境の様子や課題、子どもたちの元気な活動の様子が伝わってくる素敵な作品ばかりです。

また、模造紙大という大きな作品を作り上げるにはみんなの協力が必要で、絵が得意な子は絵を、計算や分析が得意な子はデータ作りを、字が得意な子は文字を、と多くのクラブが仲間と分担しており、作品作りを通してまわりと協力する態度やコミュニケーション能力、リーダーシップ、自分に任された作業を遂行する責任感が着実に身についています。本コンクールは「全国エコ活コンクール」という名の通り環境保全活動を顕彰して称えるものではありますが、子どもたちの思考力･表現力･発信力に加え、上述の「未来を創る力」を育むほか、みんなと話し合うことで他者との価値観の違いを知りそれらを認め合う場ともなっています。

コロナ禍以降、みんなで集まって作業する機会が減り、ICT 活用推進によって子どもたちが手書きしたものを目にすることが少なくなってきているように思います。デジタルツールは大変便利ですし、誰もが日常的にふれなくてはならないものになっていますが､子どもたちが「自分の手で書くこと」で覚え・感じることは確実にあるはずです。また「手書きで作る」からこそ作品から伝わってくる子どもたちの環境への思いや今の地域や環境への課題をどうにかしたいという熱意は、周りの人たちの心を動かしています。

本コンクールの壁新聞作品は、全てに有識者のアドバイスをつけてウェブに掲載する他、全国の自治体等に貸し出して展示するなど多くの人の目にふれる機会を設けています。調べ学習･総合的な学習のまとめや発表の場として格好の場ではないでしょうか。ぜひ次年度は壁新聞を作って「全国エコ活コンクール」にご応募ください。皆さんのチャレンジ、待ってます！

Educo No.64 2024年4月22日発行

# 学校給食を通じて子どもの好き嫌いをなくしたい

ほ・っ・と・な・出・会・い

栄養士 松丸 奨（すすむ）さん

## 栄養士さんの言葉で食に目覚める

現在、栄養士として都内の小学校に勤務していますが、小さい頃は偏食が激しく、給食の時間が苦痛でした。ある日、学校の栄養士の先生に「君のためになるものしか入っていないから、一口でいいから食べてごらん」と優しく言われました。「一口なら我慢できるな」と思って食べたところ、5時間目の体育の授業で逆上がりに初成功したのです。給食のおかげだと思い込んだ僕は、それからは苦手な物も我慢して食べるようになり、高学年になる頃は給食が大好きになっていました。

いま勤務している学校の子どもにも「君のためになるものしか入ってないから食べてごらん」とつい同じことを言っています。大抵の栄養士さんは事務室や職員室にこもりがちで、子どもとふれあう機会が少ないのですが、すごくもったいないと感じます。栄養士さんが毎日教室に行って子どもに話しかけると、たくさんフォローできるのです。「今日のサラダいやだ」と言う子に、「大丈夫。すごく甘く、おいしくしたからね」と言うだけで、食べられることもあります。いわゆる「よい子」ほど、学校の先生や親と話せていなかったりするのですが、給食の時間に毎回やってくる栄養士さんと話をするだけで、ストレス発散になることもあります。

いま勤務している学校では廊下を歩けば「松丸先生！」とみんな声をかけてくれて、1年生などは飛びついてきてくれます。顔の見える栄養士でありたいと常々思っています。

## ジェンダーギャップに悩んだ日々

今でこそ天職と思って楽しく働けていますが、学校栄養士として働き始めた当初は、男性の栄養士がどこにもいない時代だったこともあり、認めてもらえず苦労しました。「男の栄養士なんて聞いたこともない。ちゃんとできるの？」と言われたり、「肉ばかりの献立にしないでよ」と先入観から心配されたり。僕が白衣を着て教室に入れば、子どもたちは「知らない男の人が入ってきた！」と驚いてひそひそ話を始めます。先生にも子どもたちにも信用されず、心が折れかけていたある日、「子どもたちが給食を食べているところを見にいこう」と校長先生が声をかけてくださいました。教室で子どもたちが食べている様子を眺めながら、校長先生は「みんなすごくいい笑顔で食べているじゃないか」とおっしゃいました。「これが最高の景色だと思えるなら、君は絶対この仕事に向いてるよ」とも。実は校長先生はもともと音楽の先生でした。女性の先生が多い教科ゆえ、もしかしたら校長先生も若い頃、同じような目にあわれていたのかもしれません。「つらいときはいつでも自分にとって最高の景色――子どもたちの笑顔を見にいけばいい」あの言葉は今も自分の宝として、大切に胸に刻まれています。

## 給食甲子園で優勝

おいしい給食をつくりたい一心でがむしゃらに突き進んできました。高額かつ巨大な業務用オーブンを自腹で購入し、当時の1Kの部屋に設置して、スチームサウナ状態になりつつ調理法を研究したこともあります。

東京の子たちにもっと東京産の食材を食べてもらいたいと思っていた矢先、「全国学校給食甲子園」の話が舞い込んできました。これは実際に提供されている給食のおいしさなどを競う大会で、地場産物を使うことが条件です。

調べていくうちに品種改良前の姿を保っている江戸東京野菜の存在を知りましたが、お店ではめったに見かけません。そこで江戸東京野菜を作っている農家さんに、まずは信頼関係を築くため「草むしりでもゴミ拾いでもやらせてください」と頼み込み、毎週畑に通って農作業を手伝いました。念願通じて、江戸東京野菜を卸してもらえることになりました。

満を持して臨んだ決勝大会当日。大勢の報道陣のカメラの前で調理するので手が震えましたが、子どもたちのために作っているんだと己に言い聞かせ、平常心を保ちました。結果、第8回全国学校給食甲子園（応募総数2266校）において、男性栄養士として初めて優勝することができました。

## 新たな夢に向かって

給食は「食べて学べる教材」、「おいしい教科書」とも言うことができます。僕は日本中の子どもの好き嫌いをなくしたいという野心があるので、今年から仕事をしつつ大学院に通い、子どもの好き嫌いの研究をしようと思っています。うまくいけば公表して、日本中の栄養士さんに実践していただきたいです。日本の子どもたちのため、また世界の食べ物に恵まれない子たちのために、挑戦者の心を忘れず、これからも走り続けます。

**松丸 奨（まつまる すすむ）**
1983年千葉県生まれ。管理栄養士、栄養教諭。専門学校卒業後、栄養士として千葉県内の市立病院に勤務。2009年より東京都の小学校で学校栄養士として勤務。2013年、2266校が出場した第8回全国学校給食甲子園で男性初の優勝を飾る。2017年より台湾・フィリピンなど海外でも食育指導を行う。メディア出演多数。『給食が教えてくれたこと「最高の献立」を作る、ぼくは学校栄養士』（くもん出版）他、著書多数。

## Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆岡田武史氏のインタビューで、岡田さんの人柄がよくわかりました。教師集団を指導する管理職に読ませたい内容です。皆から期待されている者が未知のチャレンジをすることは、教育現場にはよくあります。（神奈川県 S.M）
◆ NOW ①のデザイン教育については、米国スタンフォード大学での研修に日本の高校生なども参加しており、これから大切な分野・教育であるので、関心をもって拝読しました。（大阪府 T.Y）
◆塩沼さん「ほっとな出会い」インタビュー。近年の若い教員はまず「やり方」を求める傾向が強くなったと感じています。うまくいくときもあれば、うまくいかないときも少なくありません。教師としての大前提として「教師は人間力を磨くべき」という言葉に納得です。（北海道 T.M）

**学びのチカラで　人と社会を　未来へつなぐ**

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。
これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。 学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。 そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版

教育出版は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています

発行所　教育出版株式会社　発行者　伊東千尋
〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館
内容について　Tel.03-5579-6554　Fax.03-5579-6574
配送について　Tel.03-5579-6546　Fax.03-5579-6548